

52 後楽園

白一色に内外野を埋め尽くした五万の観衆が、今しもおこなわれるジャイアンツのフィルディングに湧いている。

——炎天下の後楽園スタジアム。

53 同 ベンチ脇の通路（一塁側）

扇子をパタパタしながら佐藤が居る。

村上が来る。

村上「今日は本多の写真をアイスクャンディ屋にも廻して見ました」

佐藤「ご苦労さん」

満員のグラウンドを見渡して、

「たいしたもんだね……ええ」

と、振り返ると村上が又考え込んでいる。

佐藤「又かい、君……」

村上「……いや、気になる事が一つあるんです」

佐藤「なんだね？」

村上「……あの犯行があつた夕方、犯人は一ぺんコルトを返しに来ています……」

佐藤「うん」

村上「ところが、そこで犯人は僕があの子をあげるのを目撃したんですよ。もちろん通帳もあげられたと思つたに違いありません……それで、破れかぶれになつて、あの夜あの犯行が行われたとすると……」

佐藤「おいおい、君は被害者ばかりでなく、犯人にまで責任を感じ出したのかい」

村上「いえしかし、調べてみたんですが、あの前夜ピストル強盗の被害報告はありません。つまりあの男はピストルを借りには借りたが、使うのを躊躇したんですよ……それで返しに来たんだ……それなのに」

佐藤「つまらんな……そんなことの穿鑿せんさくよりは、次に来るもの

を防ぐことだよ」

村上「……」

佐藤「犯人は四万円盗んだ……地道に使える金じゃない……すぐなくなる……その金を使い果たした時、何が起これると思う……また押し入る……一度は習慣にあらずって言うが、二度となると話が違う……野良犬が狂犬になるんだ」

村上「……」

佐藤「僕の言ってることは間違ってるかい」

村上「いえ」

佐藤「じゃ、まず本多をつかまえることに全力をつくすんだね。

今日はきつと来るよ、野球ファンならこの試合見逃す筈はないからな」